



ウミホタル 掌に抄いし死霊あり



剣もて子を生めるやキリギリス

極暑かな 蚯蚓羽織の紐結び

垂直に午睡むさぼる蜻蛉かな

蟋蟀の提灯さみし草の露

喪衣着け死を啄む鴉かな

※喪衣（もぎぬ）とむらいの時に着る黒の衣服。喪服。

野に伏せる無縁仏や彼岸花

轡虫翅の楽符を掻き鳴らし

夏の夜の一声ありて夜啼蟬

雨蛙ガラスに透けた腹をのせ

しみじみと鶴の啼く夜のさみしけれ

※鶴（ぬえ）トラツグミの異称。または伝説上の怪獣。
頭は猿、手足は虎、体は狸、尾は蛇、声はトラツグミ。

芋虫の夢つむぎおり繭一つ

サルスベリ蟬も負けじと迂り落ち

猪口才な握り鋏を尾に仕込み

伴侶なくチロロチロロと鳴き申し

秋深し老蠅五徳に暖をとり

※サルスベリ(猿滑り) 百日紅。サルナメリとも言うそうな。

底ひびの滲みし甕に死児転げ

フラスコの透けた子宮に子を孕め

染色体 破れたままに発芽かな

一卵性 神・人・悪魔三つ兎いで

わが母はガラスの底に沈みおり

※染色体 生物の細胞核が分裂するときに見える糸状のもの。

猪口もてば花びら浮きて桜葬

過ぎし世の記憶の皮を剥いで喰べ

青い火を点したホタル苦笑い

山姥のお色双紙に紙魚昇天

魂を徳利に込めた棺ひとつ

※紙魚（しみ） 銀のウロコでおおわれた、紙や衣を喰べる小さな虫。
※青い火 青色発光ダイオード。

反骨の骨を抓んだ跛箸

走馬灯 亡者連れにぞ走りけり

水時計 死者の時計を抄い上げ

死の国のホタル墓碑銘なぞりゆき

棺一基 仮面の死者の笑いおり

※跛箸（びっこばし）骨揚げの時につかう箸。

漆黒の闇切りぬきて 黒い馬

方角をうしろに背負い馬走り

文明のハナカマキリに身を匿し

胡麻の蠅視えぬ責任とると言い

オーウエルの監視社会を先回り

不条理を絵筆にのせた眺めあり

※オーウエル イギリスの作家。監視社会を予告した「一九八四年」がある。

原子力 無間地獄の火を点し

処分場 悪魔サタンの穴を掘り

満腹の浄化装置に亀裂かな

汚染水 国の溺死を眺むるや

核発電 陰の兵器を隠し置き

※無間地獄 地獄のなかの地獄。阿鼻叫喚地獄。

死の商人核の傘もて六法踏み

原子カムラの識者か髑髏面

日本丸 たらいの舟の箍外れ

NHK庭の蛇蠍に手を咬まれ

うじむしの身で身を洗う桶の底

※死の商人 国境を越え武器などを売って巨利をむさぼる
無国籍の大資本企業グループ。

レイシスト ファシズムの裏地覗せ

問題児 ねぶりこガラガラ肩車

寵臣も笊に掬えば雑魚と化し

魴斗雲 悟空もどきが空を飛び

ヤマトンチュ龍のウロコを逆撫でし

※レイシズム ヘイトスピーチをなすファシストの温床。人種差別主義。

※魴斗雲（きんとうん）中国の小説「西遊記」で孫悟空の乗る雲。

※ヤマトンチュ「大和の人」。沖縄の言葉で言う本土人。

嘘言症 洩れた蛇口に涎かな

啖呵売 嘘八百回し兼ね

深怪魚 札びら跳る舌の先

マスメディア 天井棧敷で論説し

いみじくもペテン師おのれの真を問い

※啖呵売(たんかばい)まくしたて客に売り込む。

ぼんち絵で国の額縁剥がれ陥ち

情報を策に掬いし塵芥

罪も無き空翔ぶ会話網に盗り

スノーデン秘密国家の皮めくり

丸腰のわが掟にびびりおり

※スノーデン CIA (合衆国情報局) 元職員。国家の機密犯罪を
内部告発、追われる身で出国。罪状は死刑か廃人に。「特秘法」で
日本も同じ道歩む。

バケ化粧 観劇会の幕が開き

曲がり矢のそこねた的に団扇舞い

ネオナチス 尾のない女狐籠絡し

日の丸を背に嬉しいツーショット

番外編 サド・マゾ遊戯に身銭切り

※サド・マゾ 鞭あそび昂じて戦争ごっこは喰えません。

おこぼれと トリクルダウン目に訳し

一本の流しソーメン待つ身かな

日銀の連れション泡と弾けおり

異次元の透かし模様眺むるや

言祝ぐもアホノミクスと人は言い

※アホノミクス 浜矩子（同志社大教授）の蜂の一刺し。

権力におもねるサバの生き腐れ

盲杖 踏み板一つ 阿鼻地獄

罪と罰 人と神との犯科帳

勲一等 重ねがさねの嘘言癖

擬いもの歪かなしく反りかえし

※勲一等 国家のためにつくした人に与える、暗れがましい勲章

三下り半

——われわれはもうホトホト愛想がつきた。

好戦国日本よ、好戦的日本国民と権力者
共よ、もはやわれわれは人類廃滅への無理
心中の道行きをこれ以上共にはできない。

これは近年、沖繩で起草され現在引き続き
検討がなされている「琉球共和社会憲法」試
案前文の抜粋である。これに継げる言葉があ
ろうはずもない。重ねて、先の名護市長選、
続く沖繩知事選、そして昨年暮れの衆議院選
挙ともどもに歴史的勝利をもたらした。

「沖繩の人々が長い間心の底にしまい込んだ
感情が、マグマとなつて一気に噴き出した。」
沖繩タイムス社説冒頭の言葉である。「次は
本土が変わる番だ」と同紙記者の言葉。先の
前文とも併せ、これは血の歴史をくぐり抜け
た沖繩民衆による、本土ヤマトンチュに突き
つけられた「三下り半」と読まねばなるまい。
亡者は共に討たねばならぬ。

場違いの不沈空母に熨斗をつけ

二〇一五年 春

七八六一〇三二六

高知県高岡郡四万十町
大正中津川二一〇一—
〇八八〇一—七—五六六八

佐々木泰 (愚草)